

博士論文要旨

学籍番号	1220002	氏名	緒方 京
論文題目	地域における多胎家庭支援プロセスの構築と定着に関する研究		
<p>目的：妊娠から出産、育児に至る多胎家庭が求める支援と支援上の課題を明確化し、地域における支援体制の考案、実践、評価により、多胎家庭が子育ての喜びや楽しみを享受できる支援プロセスを構築し、定着させる方法を検討する。</p> <p>方法：展開の拠点は、年間平均多胎児出生件数が 10 組弱程度と少なく、多胎家庭に特化した大規模な支援体制を構築し難い小都市 A 市である。[研究 1] A 市在住の 0～3 歳の多胎児の母親とその夫または家族 7 組に半構造化面接を実施し、多胎家庭の実態と求める支援を明確化した。[研究 2] A 市保健師 8 名、A 市の多胎妊娠管理が多い病院助産師 3 名、A 市母子保健事業嘱託助産師 2 名に半構造化面接を実施し、多胎家庭支援体制の現状を把握し、課題を検討した。[研究 3] 筆者が A 市における多胎家庭支援プロセス案（以下、支援プロセス案）の素案を作成し、研究のコアメンバー（センター長、保健師リーダー、特定妊婦リーダー、母子保健リーダー、計 4 名の保健師）及び A 市保健師との検討をととして支援プロセス案試行版を策定した。[研究 4] 支援プロセス案の一環として A 市保健師、助産師を対象に学習会を開催したのち、多胎家庭 1 組に支援プロセス案を試行、修正を経て 2 組目に実践した。実践後、同意を得られた多胎家庭 1 組、及び支援プロセス案を試行した保健師 6 名に面接を行い、分析結果を反映して支援プロセス案を修正し、コアメンバーに提示した。</p> <p>結果：[研究 1] 多胎家庭は、不妊治療後妊娠や胎児の成長、産後の生活に不安を感じながら育児準備を手探りで進めていた。出産時の大量出血のダメージや母児分離は、同時授乳など多胎児特有の育児技術の習得不足に影響した。退院後は低出生体重に伴う不安や同時・交互の啼泣・授乳の対応で家族ごと睡眠不足や疲労が続くものの、育児・家事が苦しい家庭でも子育て支援事業の導入に至らず、利用しやすさが求められていた。[研究 2] 保健師は多胎家庭支援の必要性を認識しつつも、支援ニーズの捉えづらさや各家庭の実情に合わせた支援展開に戸惑いを感じていた。課題は、妊娠早期からの多胎家庭との関係性の構築、各多胎家庭に特化したケアプランの策定と実践評価、支援者間の知識・情報の共有と連携の 3 点に集約された。[研究 3] 多胎家庭が担当保健師とともに「わが家の多胎児育て」をイメージし、計画・実行・調整しながら育児する過程を支援することをコンセプトに、多胎家庭と保健師が思いや認識を共有してともに歩む支援プロセス案を考案し、その具現化に向け、多胎家庭の経過や保健師のアセスメント過程を可視化し、支援の平準化を図るツール類を作成した。[研究 4] 支援実践により、2 組目の多胎家庭は妊娠中に産後をイメージして育児体制を準備でき、産後早期の介入により社会資源の利用を調整しながら夫婦で双子の子育てを楽しむ様子が窺えた。保健師への評価面接では、支援プロセス案の適用で多胎家庭のリスクや支援ニーズの把握が容易になり、多胎育児体制の妊娠期からの整備や家庭との関係性の構築に効果が認められた。支援の定着に向け、ツール類を改良し、完成版とした。</p> <p>考察：多胎家庭が妊娠早期から多胎育児を想定できるよう保健師が情報提供し、ニーズを具体的に引き出し、育児体制の整備を支援していく過程は、育児支援に限局せず、次なる課題が生じても対応できる家族機能のエンパワーメントに繋がる、多胎家庭を孤立させない支援であった。支援プロセスの構築には、地域に精通した、構築の主体となる保健師の多胎家庭とともにありたいと願う熱意と誠意、及び多胎家庭の危機を的確に認識し、地域の資源に着実に接続する具体策の創意が必須であり、その定着には多胎家庭の個別性に応じた支援経験を支援者間で共有し向上を図る積み重ねが重要と示唆された。</p>			

(別記様式7)

番 号 :

令和 6 年 2 月 14 日

令和 5 年度博士論文審査結果報告書

主 査	松下 光子
副 査	梅津 美香
副 査	奥村 美奈子

令和 5 年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

記

学籍番号 : 1220002

氏 名 : 緒方 京

審査結果 : 1. 合格 2. 不合格 3. 保留

[審査結果要旨]

(1,000 字以内)

論文題目「地域における多胎家庭支援プロセスの構築と定着に関する研究」は、妊娠から出産、育児に至る多胎家庭が求める支援と地域における支援上の課題を明確化し、支援の方策の考案、実践、評価により、多胎家庭が子育ての喜びや楽しみを享受できる支援プロセスを構築し、定着させる方法を追究した研究である。

学生は、多胎児出生件数が少なく多胎家庭に特化した支援体制を構築しがたい小都市 A 市を拠点に保健師と協働して取り組みを行った。まず、多胎家庭の実態と求める支援を明らかにし、次いで A 市保健師や助産師への面接調査から支援上の課題を明確化した。3つに集約された課題を基軸として、支援プロセスの素案を考案し保健師との検討を通じて試行版を策定し多胎家庭支援を行った。その結果、多胎家庭が妊娠中から産後をイメージして準備ができ、産後早期の介入により社会資源の利用を調整しながら夫婦で子育てを楽しむ様子が確認された。また、保健師は支援プロセス案の適用により多胎家庭のリスクや支援ニーズの把握が容易になり、妊娠期からの多胎育児体制の整備、家庭との関係構築に効果があったと評価した。以上の過程から、支援プロセスの構築には、保健師が多胎家庭とともにありたいと願い、実態を的確に認識し地域の資源に着実に接続することが必要であり、その定着には多胎家庭への支援経験を支援者間で共有し向上を図る教育的活動の積み重ねが重要であると考察している。

以上の過程は、的確にデータ化され、論述されており、地域における多胎家庭支援の充実に貢献する研究として高く評価する。

審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。

当該学生は審査委員会に3回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。

以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。